

10.2 秋の七草

近所にイギリス人のパスタ (pastor) が住んでいて、ときどき遊びに来られます。パスタと言っても、スパゲッティ (pasta) ではありません。牧師さん (プロテスタント) のことです。

先日、彼が来て言うのですが、秋の七草はいつ食べるのか？
今年の正月、七草がゆをご馳走したことを覚えていて、秋の七草も、春の七草のように食べるものと思っていたようです。

日本語と日本の風習は、厄介です。
まあ、日本人ならこんな間違いはしないと思いますが、最近、秋の七草を正確に言える人は少なくなってきたようです。

ご承知のように、春の七草は食べ物ですから「芹、なづな、御行、はくべら、仏座、すずな、すずしろ、これぞ七種」と覚えやすくなっているのですが、秋の七草は、年間行事と関係がない上に、食べたりしないものですから、覚えにくいのですね。

秋の七草を詠んだ歌として、一番有名なのは、なんといっても、万葉集の山上憶良クンの次のもの。

秋の野に 咲きたる花を 指(および)折り 搔き数うれば 七草の花
萩の花 尾花 葛花 撫子の花 (瞿麥) 女郎花また藤袴 朝顔の花

今の私達の目で見ると、どうしてこんな花が？ って思うようなものがあるけれど、昔の人の鑑賞眼は、今のように派手なものにばかり向いていませんからね。

この七つの花のなかで、万葉時代の一番人気は、ダントツで「萩」。
圧倒的に多くの歌などに詠まれています。

今の時代の一番人気は、ダントツで「なでしこ」。
なにしろ、世界制覇してますからね。

「尾花」は、一時、アメリカからやってきた「セイトカアワダチソウ」に押されて、分が悪く、尾花、引退か？ と言われたこともあったのですが、どっこい、大和の民草は本当は強くて、最近セイトカの勢いは急激に衰退し、再び、元の勢力に戻っています。
なんといっても、月見にはススキですからね。

「葛花」は、よく見るとなかなか美しいのですが、強烈な生命力のせいで、荒地に蟠踞しているために、今は少しばかり嫌われ者。

「朝顔」は、今の朝顔ではなくて、「桔梗」のことですが、こちらは今でもなかなかの人気です。

残る二つのうち、「藤袴」は、なかなか目にふれる機会がなくなってきていますね。

源氏物語に出てくる藤袴は、夕霧が思いを寄せる玉鬘に差し出す花。

そのせいか、淡い紫の美しい花なのですが、ちょっと今は影が薄いですね。ちなみに藤袴は、準絶滅危惧種です。



おなじ野の 露にやつるゝ 藤袴 あはれはかけよ かことばかりも

[拙訳]

(あなたと同じように、藤衣を着て喪に服している私は、この藤袴のように露に濡れ、心やつれています。私(夕霧)を哀れだと思いいになって、仮初めの言葉でもかけていたいただきたいのです。)

最後の「女郎花」は、名前に「女郎」という言葉がついていて損をしていますね。

古語で女郎(おみな)は「美しい女性」のこと。(えし)は「圧(へし)」。つまり、ほかの美女を圧倒するほどに美しい女性のことです。

実は、おみなえしの花が黄色いのに対して、花の姿が同じで白い色のものがあるのですが、こちらは「男郎花(おとこえし)」と呼ばれています。

木村拓哉クンのような花? 写真左は女郎花、右は男郎花。



京都の南の八幡市に「八幡女郎花」というところがあるのですが、ここに、女郎花にまつわる物語があります。

平安の昔、男山八幡に住む男と契りを交わした都の女が、しばらく訪ねてこなくなった男の許に、はるばる訪ねて来るのですが、男（小野頼風）が他の女と暮らしているのを知って、絶望し、川に身を投げて死んでしまうのです。

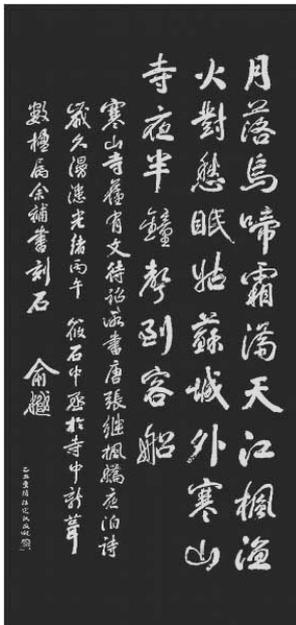
彼女の墓塚からは、着ていた山吹重ねの衣のような女郎花の花が咲いたのですが、彼女の死を悼んだ頼風が、花に近づこうとすると、避けるかのように靡き、退くと元に戻る。これを見た頼風、なんということをしてしまったのかと自らの仕打ちを悔やみ、後悔の末に自分も放生川に身を投げます。

頼風の墓塚には、片方にしか葉がない「片葉の葦」が生え、今も彼女の墓塚の方に向かって靡いているのだそうです。



謡曲「女郎花（おみなめし）」は、旅の僧が、悲しい恋に死んだ頼風と女の菩提を弔う話です。

10.5 月落ち烏啼いて女房は



月落烏啼霜滿天
江楓漁火對愁眠
姑蘇城外寒山寺
夜半鐘聲到客船

これは、誰でも一度くらいは観たことがある有名な張繼の「楓橋夜泊」という漢詩。観たことがあるというのは、寒山寺にある碑の拓本を額装したものがよく床の間にかかっているところがあるからで、最初の一行は漢文を習っていなくてもなんとか読めますね。

この漢詩の意味は、次のとおりです。

「月は落ち烏は啼いて、霜の気は夜空に満ちわたる。

紅葉した川辺の楓と漁り火、旅愁を抱いて私は最前からうつらうつらしながら、それらと向かい合っている。

と、蘇州城外の寒山寺の夜半を告げる鐘の音が、この船にまで聞こえてくる。」

(岩波文庫 中国名詩選から)

で、これが何か？

また、イチャモンつけるの？

と言われるのは不本意ですが、

この詩、私がおかしいと声を上げるまでもなく、昔から「なんだこの詩は？」と言われていて、素人の私が付け加えることなど何もないほど叩かれているのですね。

え、どこがおかしいの？

一番問題とされるのは、この詩が夜の情景を詠んだことは、誰にでも分かるのですが、それが夜のとばりが降りる頃なのか、世更けて夜半を過ぎる頃なのか、それとも夜明けが近い頃なのか、はっきりしないということなんですね。

そこで、またまた悪い癖がでて、検討してみることにしました。

まずですね、この詩の季節は、秋深い頃。

「江楓」と書いてありますから、川面に映る真っ赤な紅葉とくれば、今で言うと10月から11月にかけての季節。旧暦で言うと9月ですね。

「月落ち」とありますから、新月には月が上がらないし、常識的には三日月が落ちるところを詠んだとは考えにくいので、満月を中心に前後2日くらいと考えれば、旧暦9月中旬でしょうねえ。(新暦だと、今年の場合、11月の5日から9日。)

旧暦9月中旬の月の入り(月落ち)は、満月の15日は夜明け近い5時頃です。

次に、「鳥啼いて」とありますが、カラスは、ご存じのように、早寝早起きの鳥ですから、太陽が沈むとすぐに寝ちゃうので、夜中にカーと啼くことはありませんねえ。

ネコに襲われたら、夜中でもギャアとは啼くでしょうが。

以上から、最初の一行の前半では、この情景は満月が落ちる夜明けの頃を詠んだものということになりますね。間違いなし。早起き鳥のカラスも啼く可能性が高いし。

ところがね、厄介なのは、4行目の「夜半鐘声」。

岩波の訳者は、丁寧にも「寒山寺の夜半を告げる鐘の音」と訳していますね。

真夜中を告げる鐘が鳴っているのを聞いているのだから、時間を動かしようがない。

まあ、お寺の鐘は朝早く突くのもあるから、早朝5時頃鳴ってもおかしくないと思うんだけど、いくら何でも、5時頃を夜半というかなあ。

そういえば、一行目の「霜天に満つ」は、夜明け近くには降りる霜の気配が空气中に満ちているというのだから、やっぱりこれ、真夜中のことなのかな。

ということで、真夜中となればこれ、やっぱりネコに襲われたカラスの声みたいですねえ。

月が落ちて、カラスがギャアと啼いて、満天の霜が震える。

なんか、イメージが違う？

ということで、皆さんはいつだと思えますか？

ところで「寒山寺」とくれば、昔流行った「蘇州夜曲」。

♪ 髪にかざるか 口づけしよか 君が手折りし 桃の花
涙ぐむよな おぼろの月に 鐘が鳴ります 寒山寺

李香蘭、良いですねえ。
春の夜半に二人で聞く寒山寺の鐘の音。

でも、これが一旦結婚すると、

月落ち、烏啼いて 女房はらをたて

これ、江戸の川柳の中の風景。わかります？
夜半を過ぎても帰ってこない「宿六」を詠んだもの。

我が家の場合だと、

月落ち、烏啼いて 女房の髪 天に立ち

こわー。

10.9 十三夜と黒猫

今宵は十三夜。

先月の十五夜を、一杯機嫌で眺めた方も、月見団子を食べながら賞でた方も、是非、いっときなりとも、今宵の月を眺めて、来し方を思い起こすのはいかがでしょうか？

今宵「十三夜の月」は、わが国の独自の美の意識に基づくもの。

「この世をば わが世とぞ思ふ 望月の 欠けたることも なしと思へば」
というのは、ご存じ、御堂関白道長の全盛時の歌ですが、

十三夜の月は、これとは対極にある

「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは」（徒然草）
といういささか斜に構えた風雅の世界と言えるかも知れません。

十三夜の月見を始めたと言われる宇多天皇は、いったん臣籍に降下したものの、藤原基経の意向で天皇位に就くという異例の経歴を持った方ですが、在位中、藤原北家の摂関政治に翻弄されながらも、天皇親政を目指して、菅原道真公を登用し、藤原氏の専制に抗したことで知られています。

こうした姿勢を貫いた宇多天皇は、唐の習慣である十五夜（望月）とは異なり、富貴の世とは離れたわが国独自の名月観に立って、十三夜の月を賞でたものと思われる。

ちなみに、先ほど挙げた「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは」の徒然草は、誰もがご存じ、吉田兼好クンの手になるものですが、兼好クンの住んだ双ヶ丘の仁和寺は、宇多天皇が建てた寺なのです。

まあ、偶然なのですが。

ところで、蛇足ですが、この宇多天皇、無類のネコ好きで、日記に、自分が飼っていた黒猫賛歌を書いています。

これ、ネコ好きな方でなくても、笑っちゃうほどのデレデレ日記。

昔、「黒猫のタンゴ」って曲、流行ったでしょう。

♪ 君は可愛い僕の黒猫

♪ 黒猫のタンゴ、タンゴ、タンゴ、僕の恋人は黒い猫

なんというか、こんな感じの日記。

藤原氏相手に、奮闘努力した天皇。

十三夜の月を賞でた天皇。

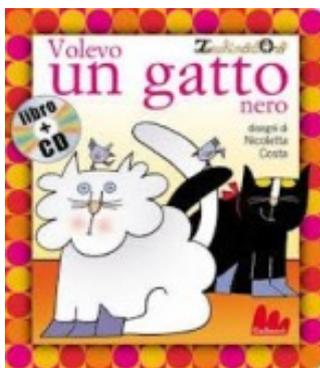
黒猫相手に、ボクのクロネコちゃんって言うてる天皇。

なかなか、宇多天皇、正体が掴めないですねえ。

いずれ機会があれば、クロネコ天皇のお話もしてみたいと思います。

ところで、「黒猫のタンゴ」は、日本の歌ではなくて、イタリアの童謡"Volevo un gatto nero"を意識したもの。

un gatto はネコ、nero は黒ですね。



もちろん、“Volevo un gatto nero”は、you-tube で聴くことができますので、今宵は、これでも聞きつつ、十三夜を眺めるのはいかがでしょうか。

10.11 佐原、秋の大祭

「佐原囃子」って言葉を聞いたことがある方は、私の年代には、かなりいるはずです。

♪ 止めてくださるな、妙心殿、…落ちぶれ果てても平手は武士じゃ、行かねばならぬ、
行かねばならぬのじゃ

これは、三波春夫の「大利根無情」

これ、すごく流行っていましたが、この中で、平手酒造(ヒラテミキさん、酒屋さんではありません)が、「佐原囃子が聞こえてくらあ」と独りごつところがありますので、多くの方はその記憶かも知れません。

でも、実際に佐原囃子を聞いたことのある方は、それほど多くはないと思います。

実は、私も、ほんものは聞いたことがありません。

佐原囃子は、ものの本によると、篠笛、大小の太鼓、鉦の他に、人のかけ声の4つが掛け合う形で奏され、日本三大囃子と言われているようです。

そこで、佐原囃子を聞きに佐原に行って参りました。

佐原市は、江戸時代、利根川の水運の中心として栄えた歴史を持ち、小江戸と言われる美しい町ですが、佐原の大祭は、てっぺんに大きな人形を載せた山車が、佐原囃子にあわせて曳かれ、山車の前で舞われる手古舞と併せて、国の重要無形民俗文化財に指定されています。

山車は、周りの風景と解け合って、夜、灯がともされると格段に素晴らしくなります。

下の写真は、夕刻、小野川沿いを進む小野道風が乗っている山車。

柳があって、蛙もいて、しっかり傘までさしている。この人形、明治4年に作られたと書いてあるから、100年以上経っているもの。



次の写真は、夜、やはり小野川沿いを進む神武天皇を乗せた山車。
提灯の灯りが、小野川の水面に映って、大変綺麗でした。



写真が苦手な私が、これを撮るのに四苦八苦していると、南横宿と書いた提灯を持ったお爺さんに話しかけられました。

私は、町を歩いているとよく見知らぬ人から声をかけられます。
どうしてなのかは自分でもわかりません。
ぼーとして、口でも開けているからでしょうか？

お爺さん、私が構えているカメラの液晶モニターの画面を後ろからのぞき込んで、それでは、川面に映る提灯の灯りがうまく撮れないから、もっと工夫しろということみたい？
でした。余計なお世話ですよ。

でも、このお爺さん、大変親切で、話し好きで、自分の所の山車のことを、見知らぬ私に熱心に話してくれました。

お爺さん、少し言葉が聞き取りにくいところがあって、半分くらい理解できなかった（英語の方がまし？）のだけれど、なんでも町内のお祭り参加者には役割分担が決められていて、肩からかけている或いは首や頭に巻いている手ぬぐいの色で役割がわかるそう。

ピンクの手ぬぐいは、山車のコントロール責任者。…山車を動かせ、踊りを止めろ、山車を回せなどの指令は、このピンクの手ぬぐいから出るとのこと。

赤の手ぬぐいは、現場全体の責任者で、ピンクの上役。但し、山車の動きのコントロールはピンクに任せて手を出さない。

緑の手ぬぐいは、その町のお祭りの責任者で、赤の上。会社で言うと、執行役員取締役のようなもの。

というのが、お爺さんの解説の解説結果。

ところでお爺さん、あなたは？

お爺さんは、見ると水色の手ぬぐい。

これはじゃ、昔、前役、当役、後役をやって引退したモンがするンじゃ。

ここだけは、なぜかはっきりわかりました。

あ、済みません。

つい私、佐原市と言ってしまったが、今は香取市です。

市町村合併も必要かも知れませんが、懐かしい歴史のある名前が次々と消えていくのは寂しいですね。

ところで、佐原の街並みは大変優れているのですが、やはり、私には、どうしても電線と電柱が大変気になりました。

山車が曳かれる場所のかなりの部分は、重要伝統的建造物群保存地区だそうです。

せめて、伝建地区くらいは、電線の地中化を進めてもらいたいものです。



10.16 重陽の節句

今日、10月16日は旧暦で9月9日に当たり、重陽の節句の日です。

端午の節句に当たる日が国民の休日になっているのと比べて、重陽の節句は、新暦、旧暦ともに、話題になることが少なく、最近では殆ど忘れ去られようとしています。

重陽の節句は、菊の節句とも言われ、不老長寿の薬としての機能を持っている菊を食する節句なのですが、新暦9月9日はまだ菊が咲いていないので、話題にならないのでしよう。

私は、仙台での生活が長かったこともあって、菊を食する文化をととても良いものと感じています。

まずは、なんと言っても「菊酒」ですね。

菊酒は、加賀の白山鶴来の菊酒が有名ですが、そんな高級なものではなく、食用菊を焼酎に一ヶ月ほど漬けたものです。飲みはじめには菊花を浮かべて。

次は菊飯。昆布のだし汁で炊いたご飯に、ゆがいて甘酢であえた菊花を混ぜていただく。

関東以北でよく食べられる菊の酢の物、おひたし、菊花のゴマ和えなどを添えて。

えーと、食後は、菊湯に入って、菊枕で寝る。

まあ、いかに菊好きでもこんなフルコースは辟易としますので、普通は、せいぜい菊酒を飲んで、菊湯に入るくらいですね。

東北地方は、青森、秋田、山形と食用菊の産地ですので、10月に入ると、食用菊がスーパーにも並びます。

種類は、黄色の「阿房宮」や「越天楽」と紫色の「延命薬」。

名前からして、不老長寿の特効薬みたいでしょう。

紫の方は、東北では「もってのほか」という名で呼ばれているのが普通です。

「もってのほか」という変な名前は、ものの本によると、「天皇家のご紋章の菊を食べるなんてもってのほか」から来たようです。これには「もってのほか」美味いという説もありますが、そんなに「もってのほか」と言うほど美味しいものとは思えませんので、こじつけかと思います。下の写真は、もってのほかの酢の物。



生ものの食用菊は食べられる時期に限られるために、干菊というのでも売られています。
だいたい、1枚 200~400 円くらい。

枚？

これは、蒸した菊花を干して、海苔のように（菊海苔とも言います）してありますので、
そのように数えます。

干菊は、殆どが阿房宮ではないかと思えます（デタラメの推測です）。



菊湯の方も、干菊だと思うのですが、こちらは袋に入ったものを知人からもらって、お湯につけるだけでしたので、実はよく知りません。

庭で菊を育てていらっしゃる方、菊の花と葉を摘んで乾燥させたものを袋に入れて、試してみたらいかがでしょうか。

うまくいくかどうかは、保証の限りではありませんが。

えっ、自分でやってから言え。

そうですねえ。